

に成り立つということです。

奈良県で市町村合併が進まなかった理由には、大規模な市や政令市がなかったことがあります。大規模な市がない分「奈良らしい知恵」という財産を活かすべきなんですね。

現場の知恵から始まって、予想を超えて県・市町村の連携が進んできています。

まず始まったのが「トンネルや橋梁の長寿命化」のために実施した市町村への技術支援です。

次に、南和の広域医療提供体制の再構築です。3つの公立病院（県立五條病院・町立大淀病院・国保吉野病院）の機能を再編し、県と五條市、吉野郡の全町村で組織する南和広域医療組合として新しい病院（南奈良総合医療センター・吉野病院・五條病院）を建設する取組で、嬉しい成果の一つです。

さらに、市町村水道と県営水道を一体的に捉え、県域全体で水道資産の最適化に取り組んでおり、設備の効率化が大変進んできています。またゴミ処理の広域化も、国に言われてではなく自ら協力する動きがまずあって、それを県が支える、水平連携に垂直で支えをするといったようなさまざまなケースが

分権の基本は「自立自存」だから連携・協働をやるんです。

（荒井）



出てきて大変嬉しく思っています。

「奈良モデル」は、県も市町村も対等な関係であることと、それぞれの自立自存が基本だから、はばかることなく県からの支援を公平にできる仕組みになってきたのではと思っています。

### 取組の成果としての信頼関係

小西…市町村同士だと、例えば消防の広域化や病院の連携など、何もしなければすくんでしまうような関係のところを、知事が身を持って突破してこれらで、信頼関係ができてきたということが最大の成果で、その果実がいろんな形で具体的に出てきているという風に評価しています。

また、現在、国は市町村の広域連携を促進する動きを見せています。奈良県が現場で必要だと思っ取り組んだことに、結果的には国が後からついてきている。この取組が時代に先んじた理由は、何が必要かを現場から予断なく引き出したからだと思いません。

### 「情報発信」と脱「縮み指向」

小西…「奈良モデル」は内容が良い分だけ地味で、地味で良い話というのは、なぜか情報発信力がない。全国に情報発信すればそれこそ県民の誇りになります。

そして一点、これは奈良県だけでなく全国の自治体の課題であろうと考えるのですが、地方自治で今、

顕著な現象が「縮み指向」なんですね。お金を使わないことばかり。

市町村が縮み指向に陥らないよう、やはり県がどンドン前広の事業を打ち出して、それらの事業が財政的にも負担にならないようにやれるんだと。ここが、非常に大きいと思います。「奈良モデル」では、政策の縮み指向を脱するというところ、現に脱してると、そこを成果として強調していただくのがとても良いんじゃないかと思うんです。

奈良県は成長から少し遠ざけられた地域であるがゆえに、逆の風が吹いてくると思います。成長経済のもとで、東京が輝くと地元の大事なものは粗雑に扱われる傾向にあった。それがだんだん、大切なものを粗雑に扱ってはいけないという考え方になってきている。この感覚の違いが、奈良という地域が逆風から順風になるきっかけ、いわば「カギ」になると思うんですよ。人口減少時代を克服するための総力戦において「奈良モデル」が光ってきますので、この取組によって奈良そのものが、逆風から順風へ風向きが変わってくる。これからも「奈良モデル」を大切にしていったきたいという思いです。

荒井…今後も県がリーダーシップを発揮し、住民に最も身近で頑張っていただいてる市町村を積極的に支援します。県と市町村、市町村同士の連携・協働のあり方について更なる議論を重ねて「奈良モデル」の取組を進化させていきます。

（収録・平成27年11月30日 桜井市立図書館にて）